

中学校社会科において論理的思考力を促す授業実践

と学習動機づけとの関連

～トゥールミンモデルを通して～

教育実践高度化専攻 教科指導重点コース 言語・社会科学系（社会）

伏谷 穂崇

本研究は、中学校社会科においてトゥールミンモデル（主張・データ・理由付け）をワークシートに組み込んだ授業が、論理的思考の表出と学習動機づけにどのように関連するかを検討した。公立中2年生3学級を介入群2学級・統制群1学級の準実験とし、リニア中央新幹線の是非を題材に1時間の授業を実施した。自己決定理論に基づく動機づけ尺度（内的・同一化・取り入れ・外的）を事前事後に測定し、2要因混合分散分析を行った結果、交互作用は認められず、内的調整のみ時期主効果が有意であった。介入群ワークシート分析ではデータ・理由付けは約8割が水準2、まとめは約6割にとどまった。自由記述から、思考過程の可視化が理解の実感を促し学習への関心と結び付く可能性が示唆され、継続実践と段階的支援の必要性が課題として得られた。